

第8章 友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係に

介在するメカニズム

—素因ストレスモデルの検討—

第7章においては、友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係を中心に検討が行われた。その結果、経験・成長目標と評価—接近目標は抑うつ傾向を抑制し、評価—回避目標は抑うつ傾向を促進することが示された。

しかしながら、3つの目標と抑うつ傾向との関係に介在するメカニズムについては検討されていなかった。3つの目標と抑うつ傾向との関係を示すだけでなく、何故上記のような関係が示されたのかを説明する必要がある。

そこで、第8章では、友人関係における3つの目標と抑うつ傾向との関係に介在するメカニズムの1つとして、素因ストレスモデルを検討する。すなわち、友人関係でストレス（ネガティブな出来事）が発生した時に、3つの目標がストレスのネガティブな影響を緩和ないし増長することにより、抑うつ傾向を抑制ないし促進するかどうかを検討する。

第8章の構成は次の通りである。まず、第1節において、目標志向性の素因ストレスモデルを検討する（研究5）。次に、第2節において、何故、3つの目標がストレスの影響を緩和ないし増長するかを検討するために、3つの目標とストレス時における認知・行動過程との関係を検討する。より具体的には、3つの目標とストレスに対する対処方略（研究6）、及び、ストレスに対する認知（研究7）との関係を検討する。最後に、第3節において、以上の3つの研究の結果を要約する。

第1節 素因ストレスモデルの検討 [研究5]

目的

研究5では、目標志向性の素因ストレスモデルを検討する。仮説は以下の通りである。

(1) 経験・成長目標と抑うつ傾向との負の関係について：経験・成長目標は、ストレスが生じた時、その影響を緩和することにより、抑うつの発生を阻止するであろう。

(2) 評価-接近目標と抑うつ傾向との負の関係について：評価-接近目標は、ストレスが生じた時、その影響を緩和することにより、抑うつの発生を阻止するであろう。

(3) 評価-回避目標と抑うつ傾向との正の関係について：評価-回避目標は、ストレスが生じた時、その影響を増長することにより、抑うつの発生を促進するであろう。

以上の素因ストレスモデルを、先行研究（坂本，1997；高比良，2000など）に従い、縦断的に検討する。つまり、第1回目の調査において目標志向性と抑うつ傾向を測定し、第2回目の調査においてストレスと抑うつ傾向を測定する。そして、第1回目で測定した抑うつ傾向得点を統制した上で、第1回目の目標志向性が第2回目のストレスと交互作用して、第2回目に測定した抑うつ傾向を予測するかどうかを検討する。

方法

被調査者 栃木県内の公立B中学校の1年生117名（男子52名，女子65名；第2回目調査では全て2年生に進級している）。

調査時期 第1回目の調査は1999年11月上旬に実施し，第2回目調査

は 2000 年 12 月上旬に実施した。

質問紙 目標志向性尺度：研究 1 において作成された尺度を用いた。

ストレス尺度：高比良（1998）により作成されたライフイベント尺度の下位尺度である，対人領域のネガティブライフイベント尺度の短縮版の項目を，友人関係における出来事に修正して用いた。項目は，「友だちから無視された」，「友だちとの関係がだめになった」，「友だちから誤解された」などであった。なお，高比良（1998）における項目番号 10 は，友人関係における出来事に修正すると，項目番号 12 と重複するため，削除した。従って，合計 14 項目を友人関係におけるストレス尺度として用いた。出来事の発生頻度としては，岡安他（1992）を参考にして，最近 3 ヶ月間に起こった頻度を，「ぜんぜんなかった」（0 点），「たまにあった」（1 点），「時々あった」（2 点），「よくあった」（3 点）の 4 件法で尋ねた。

抑うつ傾向尺度：研究 2—1 と同じ 13 項目を用いた。

手続き 第 1 回目の調査（以下，Time 1 ないし T1 と略記）において目標志向性尺度と抑うつ傾向尺度を実施し，1 年 1 ヶ月後の第 2 回目の調査（以下，Time 2 ないし T2 と略記）において，ストレス尺度と抑うつ傾向尺度を実施した。調査は全て担任教師によってクラス毎に集団で実施された。

結果と考察

各尺度の平均値，標準偏差，そして尺度間の相関は Table 8-1 に示されている。平均値と標準偏差をみると，Time 1 及び Time 2 の抑うつ傾向が低めであるが，各尺度に極端な得点の偏りはないものと考えられる。

目標志向性を抑うつ傾向の素因とした素因ストレスモデルを検討す

Table 8-1 各尺度の平均値 (M) 及び標準偏差 (SD) と尺度間の相関係数

	M	SD	②	③	④	⑤	⑥
① 経験・成長目標	29.58	4.75	.42 **	.50 **	.18 *	-.07	-.07
② 評価-接近目標	19.22	4.22	—	.60 **	.10	-.12	-.01
③ 評価-回避目標	19.60	4.19		—	.25 **	.13	.21 *
④ ストレス	10.09	6.34			—	.28 **	.49 **
⑤ 抑うつ傾向(Time1)	17.19	3.63				—	.55 **
⑥ 抑うつ傾向(Time2)	17.64	3.87					—

注) * $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$. $N = 117$.

るために、坂本（1997）や高比良（2000）に従い、Time 1 の抑うつ傾向得点を共変量とし、Time 2 の抑うつ傾向得点を従属変数とする階層的重回帰分析を行った。

分析の手続きは次の通りである。まず、第 1 ステップで、Time 1 の抑うつ傾向得点を共変量として回帰式に投入した。次に、第 2 ステップで、独立変数である目標志向性（経験・成長目標、評価－接近目標、評価－回避目標）とストレスを、同時に投入した。最後に、第 3 ステップで、3 つの目標とストレスとの交互作用（各目標の得点とストレス得点をそれぞれ掛け合わせたもの）を回帰式に投入した。以上の手続きによって、目標志向性、ストレス、及び、目標志向性とストレスとの交互作用が、Time 1 の抑うつ傾向得点から Time 2 の抑うつ傾向得点への変化をどの程度予測するかを検討できる。なお、分析にあたっては、目標志向性及びストレスの得点はそれぞれ標準得点を用いた。

階層的重回帰分析の結果が Table 8-2 に示されている。分析の結果、第 1 ステップと第 2 ステップの効果が有意であった（順に、 R^2 変化量 = .30, $p < .01$; R^2 変化量 = .15, $p < .01$ ）。第 2 ステップについて詳しく検討すると、経験・成長目標とストレスからのパスが有意であり（順に、 $\beta = -.18$, $p < .05$; $\beta = .36$, $p < .01$ ）、評価－回避目標からのパスが有意傾向であった（ $\beta = .17$, $p < .10$ ）。

さらに、第 3 ステップの交互作用効果が有意であった（ R^2 変化量 = .07, $p < .01$ ）。第 3 ステップを詳しく検討すると、経験・成長目標とストレスの交互作用、及び、評価－回避目標とストレスの交互作用が有意であった（順に、 $\beta = -.22$, $p < .05$; $\beta = .40$, $p < .01$ ）。

交互作用が有意であったため、その方向性を以下の手続きによって検討した。まず、経験・成長目標とストレスの交互作用の方向性について

Table 8-2 階層的重回帰分析の結果

投入順序	投入した変数	R^2 の変化	F値の変化	Beta	Betaの有意性検定(t値)
1	抑うつ傾向(Time1)	.30 **	49.47 **	.55	7.03 **
2	主効果	.15 **	7.34 **		
	経験・成長目標			-.18	-2.10 *
	評価—接近目標			-.03	-.32
	評価—回避目標			.17	1.77 +
	ストレス			.36	4.75 **
3	交互作用	.07 **	5.38 **		
	経験・成長目標 ×ストレス			-.22	-2.46 *
	評価—接近目標 ×ストレス			-.09	-.91
	評価—回避目標 ×ストレス			.40	3.71 **

注)従属変数は,抑うつ傾向(Time2)である。+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$. $N = 117$.

は、Time 2 の抑うつ傾向得点を予測する回帰方程式の中に、Time 1 の抑うつ傾向得点の平均値、評価－接近目標得点と評価－回避目標得点の平均値（すなわち、0）、及び、経験・成長目標得点の平均値±1標準偏差、ストレス得点の平均値±1標準偏差を代入することによって、経験・成長目標（高）／ストレス（高）群、経験・成長目標（高）／ストレス（低）群、経験・成長目標（低）／ストレス（高）群、経験・成長目標（低）／ストレス（低）群の4つの群における抑うつ傾向得点の変化量を算出した。結果はFigure 8-1に示されている。

結果から、経験・成長目標の低い生徒においては、ストレスが多くなると、抑うつ傾向が高くなることが示された。一方、経験・成長目標の高い生徒においては、ストレスの高低は抑うつ傾向の高低にほとんど影響を与えないことが示された。

次に、評価－回避目標とストレスの交互作用の方向性を検討する。Time 2 の抑うつ傾向得点を予測する回帰方程式の中に、Time 1 の抑うつ傾向得点の平均値、経験・成長目標得点及び評価－接近目標得点の平均値（0）、評価－回避目標得点の平均値±1標準偏差、ストレス得点の平均値±1標準偏差を代入することにより、評価－回避目標（高）／ストレス（高）群、評価－回避目標（高）／ストレス（低）群、評価－回避目標（低）／ストレス（高）群、評価－回避目標（低）／ストレス（低）群の4つの群における抑うつ傾向得点の変化量を算出した。結果はFigure 8-2に示されている。

結果から、評価－回避目標の高い生徒においては、ストレスが多くなると、抑うつ傾向が高くなることが示された。一方、評価－回避目標の低い生徒においては、ストレスの高低は抑うつ傾向の高低にほとんど影響を与えないことが示された。

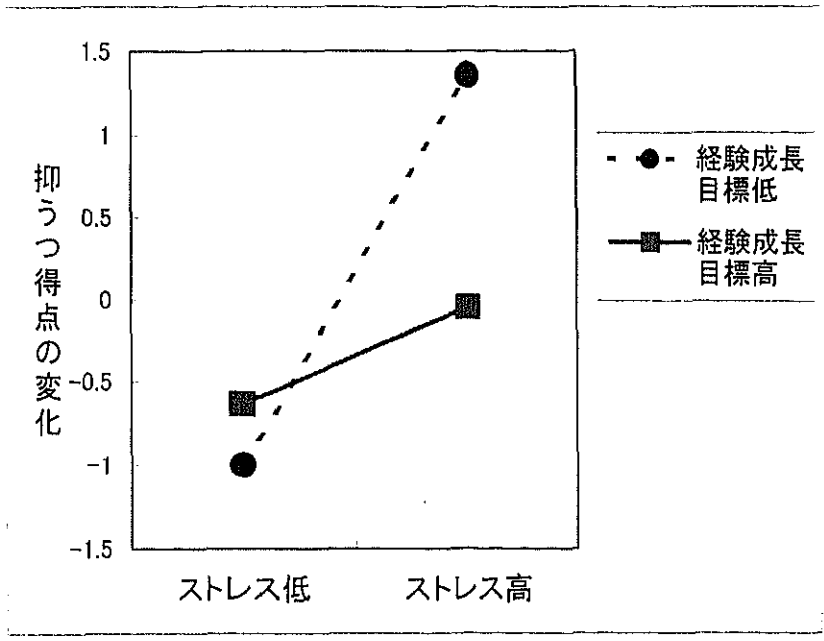


Figure 8-1 経験・成長目標とストレスとの交互作用

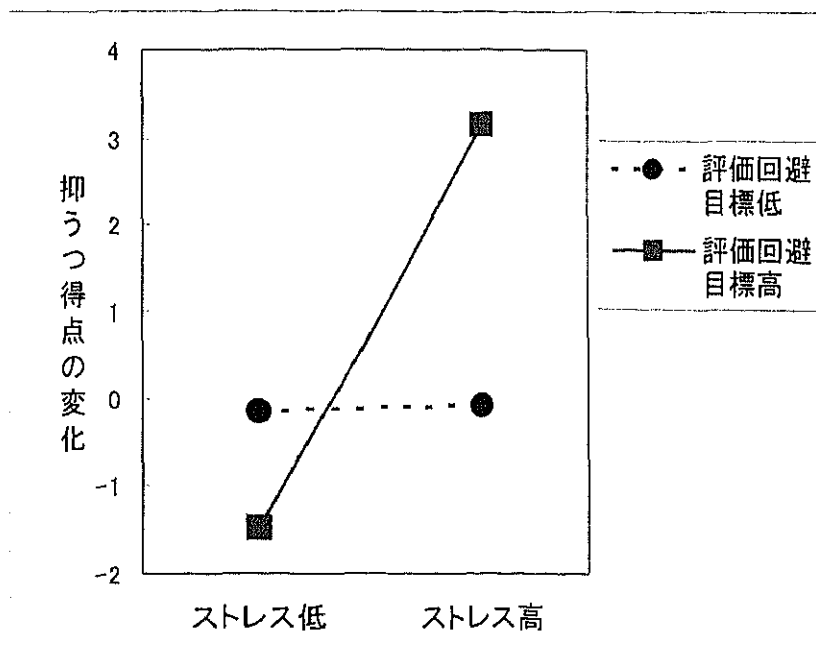


Figure 8-2 評価一回避目標とストレスとの交互作用

なお、評価－接近目標とストレスとの交互作用に関しては、有意な結果が示されなかった。この結果から、評価－接近目標は、ストレスが起こった時には、そのネガティブな影響を緩和することも、増長することもないと考えられる。この仮説に反する結果については、研究6及び研究7における、評価－接近目標とストレス対処方略及びストレス認知との関係についての結果を踏まえて考察する。

第2節 友人関係における目標志向性とストレス時における認知・行動過程との関係 [研究6・7]

第1節においては、3つの目標それぞれとストレスとの交互作用が抑うつ傾向を予測するかどうかを検討した。その結果、高い経験・成長目標はストレスのネガティブな影響を緩和することにより抑うつ傾向を抑制すること、そして、高い評価－回避目標はストレスのネガティブな影響を増長することにより抑うつ傾向を促進すること、また、高い評価－接近目標はストレスのネガティブな影響を緩和も増長もしないことが示された。

しかしながら、研究5の検討からでは、ストレスが生じた時に、何故、高い経験・成長目標はそのネガティブな影響を緩和するが、高い評価－回避目標はそれを増長するのか、また、何故、高い評価－接近目標はストレスのネガティブな影響を緩和も増長もしないのかがわからない。

そこで本節では、目標志向性のストレス緩和ないし増長のメカニズムを明らかにするために、3つの目標がストレス時における認知・行動過程とどのように関係しているかを検討する。ストレス時における認知・

行動過程としては、ストレスに対する対処方略（研究6）と、ストレスに対する認知（研究7）を取り上げる。

第1項 目標志向性とストレスに対する対処方略との関係 [研究6]

目的

本研究では、友人関係における目標志向性がストレスの影響を緩和ないし増長するメカニズムの1つとして、ストレスに対する対処方略に注目し、3つの目標とストレス対処方略とがどのように関係するかを検討する。

ストレス対処方略に関する研究を概観すると、Lazarus & Folkman (1984)の研究をもとに、加藤(2000)は、友人関係においてストレスが発生した時の対処方略として、積極的にポジティブな友人関係を成立・改善・維持したり、ストレスをポジティブに捉えたりする「ポジティブ関係方略」、ストレスフルな出来事を軽視し、問題を回避する「解決先送り方略」、友人関係を放棄する「ネガティブ関係方略」があることを示している。さらに、前者2つの方略は心理ストレス反応を減少させ、後者の方略は心理ストレス反応を増加させることが示されている。

加藤(2000)の研究においては、ネガティブ関係方略は友人関係を放棄する不適応的なストレス対処方略として捉えられている。しかし、ストレス（例えば、友人から拒否された）が生じた時に友人関係を放棄する方略には、①友人関係全般を放棄する（回避的な）方略と、②ストレス源となった相手（自分を拒否した相手）との関係は放棄するが、別の友人関係を深めたり、新たに求めたりする（接近的な）方略の2つがあると考えられる。そして、前者の方略はより不適応的であるが、後者の

方略はより適応的な対処方略であると考えられる。

以上の考察を踏まえ、本研究では、加藤（2000）のストレス対処方略におけるネガティブ関係方略を、友人関係全般を放棄する「ネガティブ関係一回避方略」と、別の友人関係を深めたり、新たに求めたりする「ネガティブ関係一接近方略」とに区別し、ポジティブ関係方略と解決先送り方略を含めた4つのストレス対処方略と目標志向性との関係を検討する。

方法

被調査者 茨城県内の公立B中学校の1年生86名（男子44名，女子39名，不明3名），2年生54名（男子30名，女子24名），合計140名。

調査時期 2002年2月中旬。

質問紙 目標志向性尺度：研究1で作成された尺度において因子負荷量の高かった項目を用いた。経験・成長目標は7項目，評価一接近目標は5項目，評価一回避目標は5項目，それぞれ用いた。

ストレス対処方略尺度：加藤（2000）の作成した尺度の内，ポジティブ関係方略と解決先送り方略に関しては因子負荷量の高かった項目を用いた（それぞれ，6項目，5項目）。ポジティブ関係方略は、「積極的に肯定的な友人関係を成立・改善・維持する対処方略」及び「ストレスをポジティブに捉える対処方略」であり、「相手のことをよく知ろうとした」，「積極的に話をするようにした」，「この経験で何かを学んだと思った」，「人間として成長したと思った」などの項目で構成される。解決先送り方略は、「ストレスフルな出来事を軽視し，問題を回避する対処方略」と定義され，「気にしないようにした」，「何もせず自然の成り行きに任せた」，「何とかかなると思った」などの項目で構成される。

ネガティブ関係－接近方略とネガティブ関係－回避方略に関しては、加藤（2000）のネガティブ関係方略を参考にして、独自に作成した。ネガティブ関係－接近方略は、「友人関係でストレスが起こった時、ストレス源となった相手との関係を放棄して、別の友人関係を深めたり、新たに求めたりする方略」という定義を反映するように、8項目作成した。項目は、「自分と気の合う他の友達をさがした」、「新しい友達を作ることにした」、「他の友達との仲を深めようとした」、「他の友達に自分を認めてもらおうとした」などである。ネガティブ関係－回避方略は、「友人関係でストレスが起こった時、ストレス源となった相手との関係を放棄するのみならず、友人関係全般から回避する方略」という定義を反映するように、7項目作成した。項目は、「友だちづきあいを一切しないようにした」、「1人でいることを選んだ」、「どんな友達の遊びのさそいでもことわるようにした」、「だれとも本音で付き合わないようにした」などである。

教示は、三浦・坂野・上里（1997）を参考にし、「この3ヶ月間、あなたが友人関係で体験したストレス（嫌な出来事）は何ですか。そのストレスに対してあなたは以下の行動や考えをどのくらい行いましたか」であった。教示に続いて、各項目に対して「ぜんぜんしなかった」（0点）、「あまりしなかった」（1点）、「少しした」（2点）、「よくした」（3点）の4段階で回答を求めた。

手続き 担任教師によってクラス毎に集団で実施された。

結果と考察

（1）ストレス対処方略尺度の検討

平均値が極端に低かったネガティブ関係－接近方略の1項目（「その

人とは別の部活にかえた」； $M=0.27$ ， $SD=0.73$) と，ネガティブ関係一回避方略の1項目（「学校をしばらく休んだ」； $M=0.30$ ， $SD=0.79$) を除き，各下位尺度毎にそれぞれ，平均値，標準偏差，ならびに α 係数を求めた (Table 8-3)．結果を検討すると，ネガティブ関係一回避方略尺度の得点が低い傾向にあるが， α 係数は全て.70以上と十分な値であった．また，新たに作成したネガティブ関係一接近方略とネガティブ関係一回避方略との間には，.53 ($p<.01$) と，中程度の正の相関が示された．この結果については，両者とも，ストレス源となった相手との関係を放棄する，という点においては同じ方向性をもつ対処方略であるためと考えられる．

(2) 「友人関係における目標志向性→ストレス対処方略」の重回帰分析
まず，各尺度の平均値，標準偏差，そして尺度間の相関係数を求めた．結果は，Table 8-4に示されている．

次に，「友人関係における目標志向性→ストレス対処方略」という関係を，重回帰分析により検討した (Table 8-5)．重回帰分析を行った結果，目標志向性から，ポジティブ関係方略，ネガティブ関係一接近方略，そして，ネガティブ関係一回避方略に対して，重回帰式は有意となった (順に， $F(3, 136)=25.01$ ， $p<.01$ ； $F(3, 136)=8.64$ ， $p<.01$ ； $F(3, 136)=3.23$ ， $p<.05$)．解決先送り方略に対しては，重回帰式は有意傾向にとどまった ($F(3, 136)=2.40$ ， $p<.10$)．

標準偏回帰係数を検討すると，まず，経験・成長目標から，ポジティブ関係方略に正の有意なパスが示された．次に，評価一接近目標からは，ポジティブ関係，ネガティブ関係一接近の2つの方略に正の有意なパスが示された．最後に，評価一回避目標からはネガティブ関係一回避方略に正の有意なパスが示された．

Table 8-3 各ストレス対処方略の平均値(M)・標準偏差(SD)・ α 係数

	ポジティブ関係方略	解決先送り方略	ネガティブ関係—接近方略	ネガティブ関係—回避方略
M	9.28	8.59	8.34	4.11
SD	4.51	3.62	5.20	3.83
α	.80	.71	.78	.73

Table 8-4 各尺度の平均値(M)及び標準偏差(SD)と尺度間の相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	②	③	④	⑤	⑥	⑦
① 経験・成長目標	21.74	4.31	.45 **	.33 **	.56 **	.16 *	.25 **	.03
② 評価—接近目標	14.93	3.61	—	.57 **	.44 **	.18 *	.37 **	.02
③ 評価—回避目標	12.99	3.69		—	.26 **	.03	.32 **	.22 **
④ ポジティブ関係方略	9.28	4.51			—	.21 *	.38 **	.22 **
⑤ 解決先送り方略	8.59	3.62				—	.24 **	.10
⑥ ネガティブ関係接近方略	8.34	5.20					—	.53 **
⑦ ネガティブ関係回避方略	4.11	3.83						—

注) + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$. $N = 140$.

Table 8-5 「友人関係における目標志向性→ストレス対処方略」重回帰分析結果

	ストレス対処方略			
	ポジティブ関係	解決先送り	ネガティブ関係—接近	ネガティブ関係—回避
経験・成長目標	.45 **	.12	.09	.00
評価—接近目標	.26 **	.20 +	.24 *	-.17
評価—回避目標	-.03	-.12	.16 +	.31 **
重決定係数(R^2)	.36 **	.05 +	.16 **	.07 *

注) 数値は標準偏回帰係数である。+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$. $N = 140$.

結果から、①経験・成長目標の高い者は、友人関係でストレスが発生した時、ストレス源となった相手との関係を積極的に修復しようとしたり、ストレスを経験の獲得や自己成長の機会としてポジティブに捉えようとする事、②評価一回避目標の高い者は、ストレスから友人関係全般を自分から放棄することが見出された。これらの結果から、経験・成長目標はストレス時にそのネガティブな影響を受けにくくさせるが、評価一回避目標はストレス時にそのネガティブな影響を受けやすくさせる。1つの理由として、前者はストレスに積極的に対処するよう方向づけるが、後者はストレスに消極的に対処するよう方向づけるためであると考えることができる。

また、③評価一接近目標の高い者に関しては、以下のように友人関係のストレスに対処していることが考えられる。すなわち、1) ストレッサーとなった相手との関係を修復しようとして、良い評価を取り戻そうとする（ポジティブ関係方略）が、一方で、2) 良い評価を得られなくなった相手のことは考えずに、他に受け入れられる可能性のある他者を求める（ネガティブ関係一接近方略）、というストレス対処である。

これらの対処方略は、どちらも積極的な対処方略であるが、同時に実行された時には、相手からすれば相反する行動と移るであろう。つまり、ストレッサーとなった相手からすれば、自分との関係を修復しようとする行動（ポジティブ関係方略）と、自分との関係を放棄して別の関係を求める行動（ネガティブ関係一接近方略）を同時に示されるため、評価一接近目標をもつ者の行動は、相反する矛盾した行動と映るであろう。従って、この相手は、評価一接近目標をもつ者との関係を回復しようとは考えなくなり、評価一接近目標のポジティブ関係方略は失敗に終わる可能性が高いのではないかと考えられる。しかし、評価一接近目標をも

つ者は、補償的に他の友人関係を深めたり新たに求めたりする方略をとることから、その点では、友人関係全般を回避する評価－回避目標とは異なり適応的であるかもしれない。研究5において「評価－接近目標はストレスのネガティブな影響を緩和も増長もしない」という結果が示された理由の1つは、このように、2つの対処方略を同時にとることによる、不適応性と適応性の相殺効果のためであると考えることができる。

ネガティブ関係方略を本研究のように接近と回避の次元の2つに分けることは、ストレス対処方略の研究に対しても有益な示唆をもつであろう。しかし、ネガティブ関係－接近方略が適応的な対処方法であるという点については、本研究では実証されていない。概念的に適応的であると判断するだけでなく、今後はストレス反応などとの関係を検討することにより、ネガティブ関係－接近方略の適応的機能を実証することが必要である。

第2項 目標志向性とストレスに対する認知との関係 [研究7]

目的

研究7では、友人関係における目標志向性がストレスの影響を緩和ないし増長するもう1つのメカニズムとして、ストレスに対する認知に注目し、3つの目標とストレス認知とがどのように関係するかを検討する。ストレスに対する認知としては、「友人関係においてストレス（ネガティブな出来事）が起こった時に、それをどのくらい嫌悪的に評価するか」を測定する。

方法

被調査者 栃木県内の公立 B 中学校の 2 年生 132 名（男子 57 名，女子 67 名，不明 8 名）。なお，被調査者は一部研究 5 と重複する。

調査時期 2000 年 12 月上旬。

質問紙 目標志向性尺度：研究 1 において作成された尺度を用いた。

ストレス認知尺度：高比良（1998）により作成されたライフイベント尺度の下位尺度である，ネガティブな対人ライフイベント尺度の短縮版の項目を，友人関係における出来事に修正し，かつ，ストレス認知を測定できるように改変した尺度を用いた（14 項目）。ネガティブな対人出来事の項目それぞれに対して，①それがここ 3 ヶ月の間にどのくらい起こったか（出来事の発生頻度），②それがどれくらいいやな（よい）経験だったか（ストレス認知）の評定を求めた。①出来事の発生頻度としては，「ぜんぜんなかった」（0 点），「たまにあった」（1 点），「時々あった」（2 点），「よくあった」（3 点）の 4 段階で尋ねた。また，②ストレス認知の評定としては，「非常にいやだった」（-3 点），「かなりいやだった」（-2 点），「少しいやだった」（-1 点），「どちらともいえない」（0 点），「少しよかった」（+1 点），「かなりよかった」（+2 点），「非常によかった」（+3 点）の 7 段階で求めた。なお，ストレス認知の得点に関しては，結果をわかりやすくするために，データ入力の際に正負の符号を逆にして得点化した。

手続き 担任教師によってクラス毎に集団で実施された。

結果と考察

分析に先立ち，ストレスの頻度が 0 であった被調査者を検討した。その結果，2 名が該当したため，この 2 名を除いて以下の分析を行った。

まず最初に、各尺度の平均値、標準偏差、及び各尺度間の相関係数を求めた。結果を Table 8-6 に示す。

次に、「友人関係における目標志向性→ストレス認知」という関係を、重回帰分析により検討した。それぞれの目標が、ストレスの頻度に関わらずストレス認知に影響しているかどうかを検討するために、ストレスの頻度も独立変数として投入して分析を行った。結果は Figure 8-3 に示されている。

結果から、重回帰式は有意となった ($F(4, 125) = 26.27, p < .01$)。標準偏回帰係数を検討してみると、ストレスの頻度からの正の有意なパス ($\beta = .63, p < .01$) と、評価一回避目標からの正の有意なパス ($\beta = .19, p < .05$) が示された。経験・成長目標及び評価一接近目標からは有意なパスは示されなかった。

これらの結果から、ストレスに遭遇する頻度が多ければ多いほど、ストレスの嫌悪的な評価も高くなることが示された。この結果については、ストレスを1回、2回と経験していけば、それに伴ってストレスの嫌悪的な評価も加算されていくことを考えれば、当然といえるであろう。そして、評価一回避目標の高い生徒は、ストレスの頻度に関わらず、ストレスが生じた時にそれをネガティブに評価することが示された。この結果から、評価一回避目標の高い生徒は、友人関係においてストレスをわずかしか経験していなくても、それを嫌悪的に解釈し、そのネガティブな影響を受けやすいと考えられる。評価一回避目標の高い生徒からすれば、友人関係におけるネガティブな出来事は、彼らの目標（「友達からの悪い評価を避ける」）がまさに達成されなかったことを意味するために、ネガティブな自己認知が高まって、より嫌悪的に評価されるのであろう。

経験・成長目標ないし評価一接近目標の高い生徒については、ストレ

Table 8-6 各尺度の平均値(M)及び標準偏差(SD)と尺度間の相関係数

	M	SD	②	③	④	⑤
① 経験・成長目標	29.98	5.01	.36 **	.30 **	.14	.13
② 評価-接近目標	19.40	4.26	—	.55 **	.03	.06
③ 評価-回避目標	19.41	4.27		—	.16 *	.26 **
④ ストレスの頻度	10.04	5.89			—	.66 **
⑤ ストレス認知	9.35	7.40				—

注) ストレス認知に関しては、データ入力の際、正負を逆転して得点化した。

+ $p < .10$, ** $p < .01$. $N = 130$.

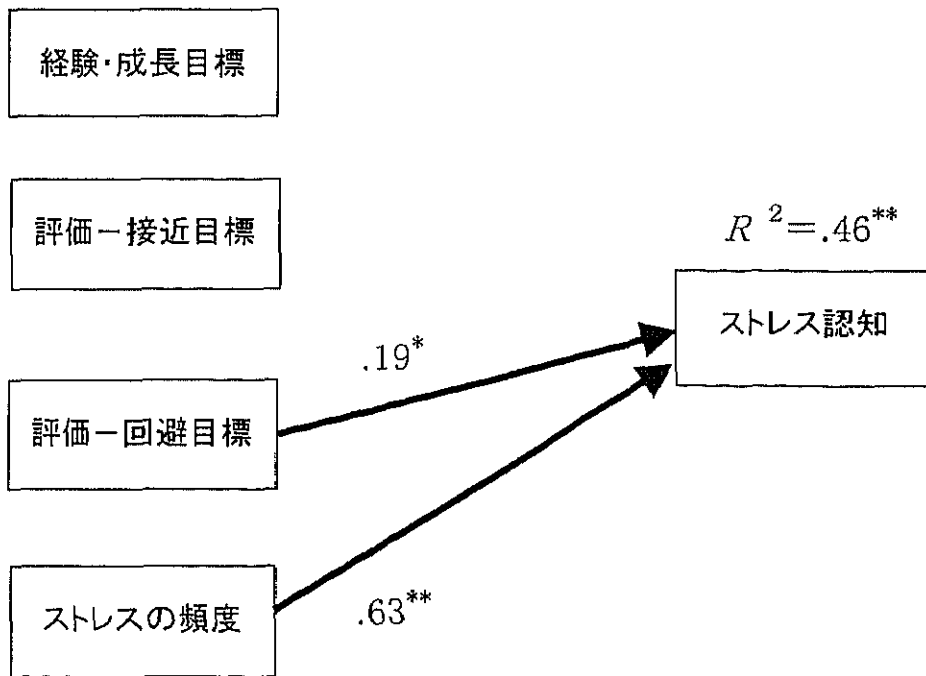


Figure 8-3 「友人関係における目標志向性とストレス頻度→ストレス認知」
の重回帰分析の結果

注) 数値は標準偏回帰係数を表す。* $p < .05$, ** $p < .01$. $N = 130$.

スを嫌悪的に評価しないわけではない（ストレスを好意的に評価するわけではない）ことが示された。経験・成長目標の高い生徒に関していえば、ネガティブな出来事を「経験の獲得」や「自己の成長」のための機会としてポジティブに捉えることがあっても（研究6）、それをネガティブに評価しなかったり、あえて「良い」あるいは「好ましい」などと考えたりすることはないようである。本研究においては、ストレスのポジティブな評価として、「少しよかった」から「非常によかった」という評定を用いたが、ストレスに対する日常的な経験を考えてみると、ストレスをあえて「良かった」ないしは「好ましかった」と捉えることはほとんどない。従って、この評定は、ストレスに対するポジティブな認知を測定するものとしては不適切であったかもしれない。今後は、「自己成長の良い機会と考えた」、「いろいろな人がいるということを知る良い経験となった」などといったポジティブな評定を、ネガティブな評定（「少しいやであった」から「非常にいやであった」）とは独立させて用いる必要がある。

そして、評価一接近目標の高い生徒に関していえば、友人関係においてネガティブな出来事に遭遇した時、それを完全に無視することはできないようである。つまり、必ずしも、「良い評価に関心を向ける＝悪い評価を気にしない」というわけではないと考えられる。彼らの目標は「友達から良い評価を得ること」であるために、ネガティブな出来事は、その目標の達成の失敗を示唆するものとなり、それを完全に無視するわけにはいかなくなるのかもしれない。研究5において、高い評価一接近目標がストレスの影響を緩和しなかったもう1つの理由としては、このように、評価一接近目標の高い生徒がストレスを完全に無視できるわけではないことが考えられる。また、これは経験・成長目標に関してもいえ

ることであるが、ストレスの経験頻度も、ストレスの評価に影響すると考えられる。つまり、1度や2度の些細なネガティブ出来事であれば、評価－接近目標の高い生徒は、それを無視してやり過ごすこともできるかもしれないが、それが複数となると、無視できず、嫌悪的な評価が高まるかもしれない。このように、ストレスの経験頻度も、評価－接近目標ないし経験・成長目標とストレス認知との関係に影響したのではないかと考えられる。

第3節 第8章のまとめ

第8章においては、友人関係における3つの目標と抑うつ傾向との関係に介在するメカニズムの1つである、素因ストレスモデルの検討を中心に、研究5から研究7までの3つの研究が行われた。3つの研究の結果をまとめたものが、Figure 8-4に示されている。

まず、研究5では、友人関係における3つの目標がストレスのネガティブな影響を緩和ないし増長することにより、抑うつ傾向を抑制ないし促進するかどうか（素因ストレスモデル）を検討した。結果は以下の通りであった。

(1) 経験・成長目標は、ストレスが起こった時、そのネガティブな影響を緩和することにより、抑うつ傾向の発生を阻止する。

(2) 評価－接近目標は、ストレスが起こった時、そのネガティブな影響を緩和も増長もしない。

(3) 評価－回避目標は、ストレスが起こった時、そのネガティブな影響を増長することにより、抑うつ傾向の発生を促進する。

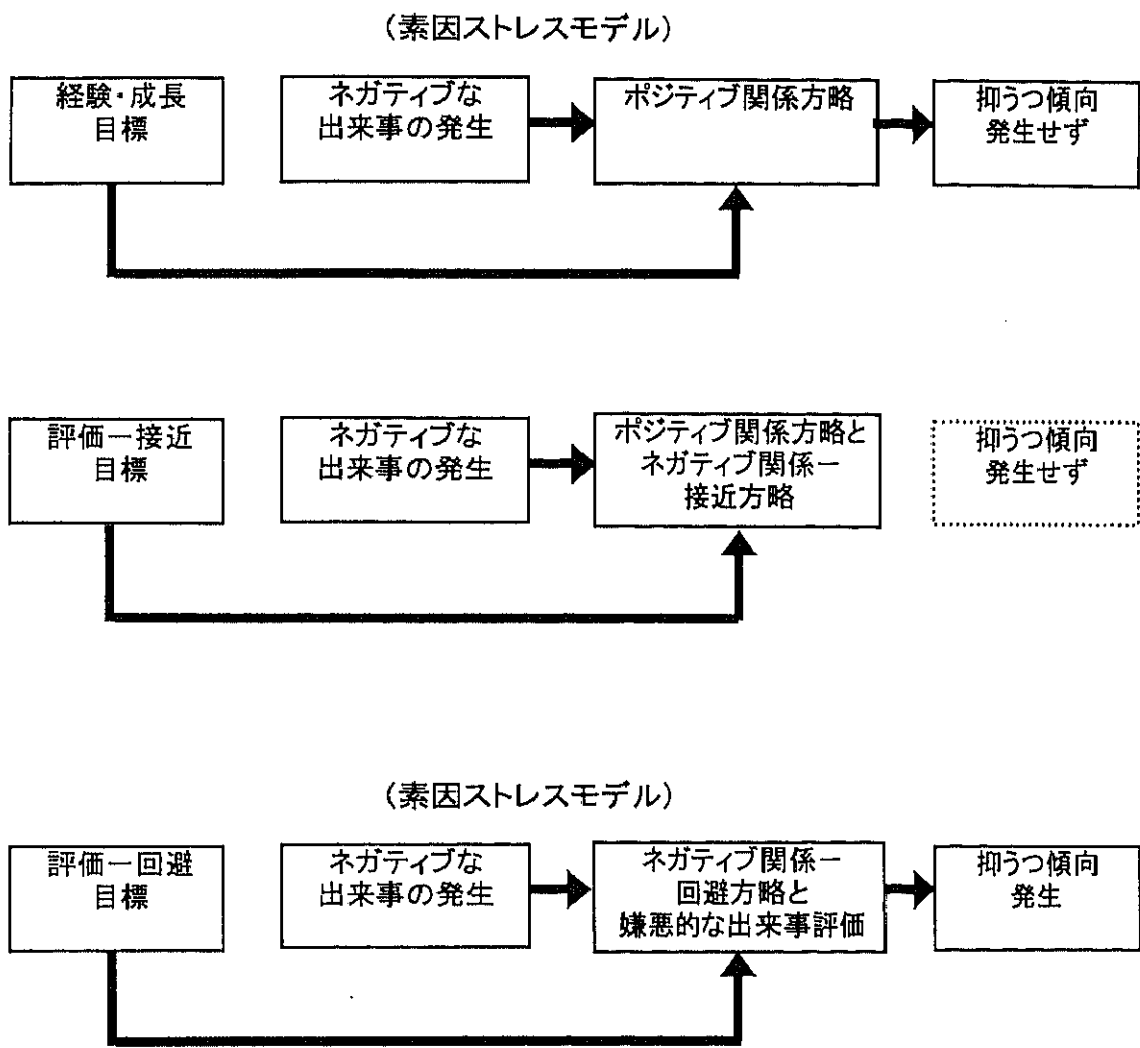


Figure 8-4 第8章 (研究5から研究7) の結果の要約

次に、研究6と研究7では、3つの目標が、何故、ストレスの影響を緩和しないし増長するか（あるいは、緩和も増長もしないか）を説明するために、3つの目標とストレス対処方略及びストレス認知との関係を検討した。2つの研究から、以下の結果が見出された。

(1) 経験・成長目標は、友人関係でストレスが発生した時、ストレスに対する嫌悪的な認知を抑制するわけではない（研究7）が、ストレス源となった相手との関係を積極的に修復しようとしたり、ストレスを「経験の獲得や自己成長のための良い機会である」とポジティブに捉える対処方略（ポジティブ関係方略）を促進する（研究6）。

(2) 評価-接近目標は、友人関係でストレスが発生した時、ストレス源となった相手との関係を積極的に修復しようとする対処方略（ポジティブ関係方略）をとる一方で、ストレス源となった相手との関係を放棄して、別の友人関係を深めたり、新たに求めたりする対処方略（ネガティブ関係-接近方略）も促進する（研究6）。また、ストレスに対するネガティブな認知を抑制するわけでも促進するわけでもない（研究7）。

(3) 評価-回避目標は、友人関係でストレスが発生した時、ストレスに対する嫌悪的な認知を促進し（研究7）、ストレス源となった相手との関係を放棄するのみならず、全ての友人関係を放棄しようとする対処方略（ネガティブ関係-回避方略）を促進する（研究6）。

以上の結果を踏まえると、第1部第6章第3節で示された仮説のうち、支持された仮説は次の通りである。

(1) 経験・成長目標に関して

仮説通り、ストレス時に相手との関係を積極的に修復しようとしたり、ストレスをポジティブに捉える対処方略を促進することにより、ストレスのネガティブな影響を緩和し、その結果抑うつ傾向の発生が阻止され

ることが示された。つまり、素因ストレスモデルが支持された。

(2) 評価—接近目標に関して

仮説通り、ストレス源となった相手との関係を放棄して別の友人関係を深めたり新たに求めるストレス対処方略を促進することが示された。しかし、仮説に反して、ストレス源となった相手との関係を修復しようとするストレス対処方略も同時に促進すること、そして、ストレスを全く無視できるわけではないことが示された。以上のストレスに対する認知・行動過程のために、評価—接近目標はストレスの影響を緩和しているわけではないことが示された。従って、評価—接近目標に関する素因ストレスモデルは支持されなかった。

(3) 評価—回避目標に関して

仮説通り、ストレスが生じた時、ストレスに対する嫌悪的な認知を促進し、友人関係全般からの引きこもりを促進するために、ストレスのネガティブな影響を受けやすくなり、結果として抑うつ傾向に陥ることが示された。つまり、素因ストレスモデルが支持された。

次章においては、友人関係における3つの目標と抑うつ傾向との関係に介在するもう1つのメカニズムである、ディストレス/ユーストレス生成モデルの検討を行うことにより、両者の関係に介在するメカニズムをより詳細に検討する。